

## 学位論文及び審査結果の要旨

横浜国立大学

氏名	須賀 郁子		
学位の種類	博士 (学術)		
学位記番号	都市博甲第2303号		
学位授与年月日	2022年3月24日		
学位授与の根拠	学位規則 (昭和28年4月1日 文部省令第9号) 第4条第1項及び横浜国立大学学位規則第5条第1項		
学府・専攻名	都市イノベーション学府 都市イノベーション専攻		
学位論文題目	ホームレス支援の医療人類学的研究 —ハウジングファースト東京プロジェクトに関わる医療者たちの眼差しの変化—		
論文審査委員	主査	横浜国立大学	教授 藤掛 洋子
		横浜国立大学	教授 松本 尚之
		横浜国立大学	教授 齊藤 麻人
		横浜国立大学	准教授 三浦 倫平
			江原 由美子

## 論文及び審査結果の要旨

本博士論文の目的は、「見えない人」とされホームレス状態になる人の「声」を医療者たちが聞くことのできない理由（壁）を明らかにし、その「声」が「聞こえるようになる方法」と医療者ら及び医療者の今後のあり方を考察することにある。対象とする事例は、東京・池袋で実践されるホームレス支援のための「ハウジングファースト東京プロジェクト」である。そこに参加するゆうりんクリニックと訪問看護ステーションKAZOCの活動に関与する医療者たちの実践と経験を、医療人類学の研究方法の一つであるヘルス・エスノグラフィーを援用し、社会構成主義に立脚し描き出した。論文構成は以下の通りである。序章では、研究背景と目的、研究方法、言葉の定義を示した。

第1章では、日本においてホームレス状態にある人がどのように語られてきたのか、先行研究より明らかにした。

第2章では、ハウジングファーストが提唱する患者「その人」主体の医療について整理し、医療人類学者クラインマンの「病いの語り」の説明モデルを乗り越える可能性のあるオープンダイアログについて確認した。また、医療人類学における須賀氏のポジショナリティと方法論を明確にした。

第3章では、失踪を繰り返す、支援困難層と言われていた一人のホームレス状態にある人の「声」をもとに、「見えない人」となっていく過程を記述し、支援につながらなかった理由を明らかにした。

第4章では、ホームレス支援活動を行う医療者・精神科医の「声」をもとに、なぜ現在のような支援方法が構築されてきたのか、それに伴う支援者・医療者側の葛藤や課題と支援者・医療者たちの意味世界を明らかにした。

第5章では、訪問看護ステーション KAZOC に勤めはじめた一人の医療者（看護師）の声をもとに、彼女が、ホームレス支援に携わることを通し、彼ら/彼女らへの見方が変化していった過程を明らかにした。

第6章では、訪問看護ステーション KAZOC 所長へのインタビューより、設立背景と活動理念を記述し、KAZOC が実践するハウジングファーストの社会的意義を明らかにした。

第7章では、ゆうりんクリニックが設立された背景を医療者・内科医の「声」をもとに確認した上で、クリニックにおける日常や診察風景などを記述し、オープンダイアログという思想がもたらす可能性を分析した。

第8章では、須賀氏の訪問同行の経験と、オープンダイアログを実践する三人の医療者の「声」をもとに、オープンダイアログにより医療者自身が変化していく過程を明らかにした。終章では、「見えない人」とされてしまいホームレス状態になる人々の「声」を医療者が聞くことを妨げる壁として、ステップアップ方式の課題を考察した。さらに「見えない人」の声が聞こえるようになるための方法について考察し、合理的で効率的であることを追求し過ぎた結果、切り捨てられてしまった「感情」が置き去りにされてきたからであると結論付けた。「感情」を切り捨てられることにより生じる鬱憤や葛藤は、自分の常識から逸脱しているとみなす者に向けられ、不寛容になり排除しようとする。そのような状態に対して、誰であっても、一人一人の「声」が尊重される環境を整える一助として、オープンダイアログは一つの可能性を示すことができた。

審査委員より出された質問・コメントと発表者による応答を以下に示す。本研究は、これまでのホームレス支援が前提としていたステップアップ方式の課題を明らかにし、新しい支援の哲学、モデルについて明らかにした意義深い研究である。また、予備審査の際に出された問いである「人類学的研究とは何か」については、看護師としてのポジションを見直し、実践に寄与する形で人類学の中でも応用研究に焦点を当てたことにより専門性が高まり、目指すべき視点が明確になったと応答した。「社会構成主義に立脚することで得られたことは何か」という問いに対し、ラベリング論に基づき、時代ごとにホームレス状態にある人がどのように問題視されてきたのかを記述したことで、医療者自身が縛られている規範について浮き彫りにすることができたと応答した。しかし、社会学においても「見えない人」とされてしまう人に対するケアについては論じられてきており、その関連性や医療者の苦悩についての記述が弱いのではないかという指摘に対して、今後の課題とすると応答した。

本博士論文は、看護人類学と医療人類学の応用研究がどのように展開してきたのか系譜を整理し、人類学・現象学が接合された形で応用的な人類学的研究が実践されていることを明らかにするとともに、医療人類学の応用研究と医療実践者のポジショナリティを明確にした意義ある研究である。また、ヘルス・エスノグラフィーを援用しながら社会構成主義に立脚したことから、これまで十分に議論がなされてこなかった医療者が無意識に抱いている構造的スティグマや規範を浮き彫りにし、ホームレス状態にある人の「声」を無意識に排除していることを明らかにしたオリジナリティの高い研究である。現在も何らかの理由で医療へのアクセスが困難な人々が存在する。そのため、医療者は、その要因を構造的な観点から捉えるとともに、社会的公正という視座をもつことが求められている。病院中心医療から地域中心医療へと転換する中で求められる医療者の関わり（眼差し）と課題に対し、オープンダイアログという思想と実践が新たな可能性を与え得ると示した点も本研究の意義である。

提出された論文に対し、iThenticate を用い既往文献との重複の有無を確認した。専門用語や一般的な事項の定義、参考文献の表題を除いて既往文献との重複はなく、剽窃、盗用の不正行為はないことを確認した。以上から、本論文は学術的価値や新規性を十分に含んでおり、博士（学術）の学位にふさわしいと判断された。

#### （試験の結果の要旨）

須賀郁子氏の学位論文公聴会を審査委員全員出席のもと令和4年1月28日10時30分より12時00分まで遠隔にて実施した。公聴会では、須賀氏による40分の発表と30分の質疑応答を行った。審査委員会は、同日、11時40分より12時10分まで遠隔にて実施した。審議の結果、本博士論文は、看護人類学と医療人類学の応用研究を架橋し、医療人類学における医療実践者のポジショナリティを明確にした点が高く評価された。特に社会構成主義に立脚したことで、今まで議論が十分になされてこなかった医療者が無意識に抱いている構造的スティグマや規範を浮き彫りにし、ホームレス状態にある人の「声」を、医療者が無意識に排除していたことを明らかにした点がオリジナリティである。これまでのホームレス支援が前提としていたステップアップ方式の課題も明らかにし、ハウジングファーストやオープンダイアログという新たな支援哲学を示したことは今後の地域中心医療における医療・医療者のあり方に示唆を与え得るものである。

以上の研究成果より、博士学位論文として十分な内容であると判定した。また、質疑にも的確に応答していたこと、日本語による査読論文と、英語による学会発表もあることから、博士号を授与される学力を有していると判定した。また、博士後期課程を修了するに必要な単位は取得済みであることも確認した。

・外国語（英語）の対外発表として以下を確認した。

IKUKO SUGA, “The Meaning of Housing First as Practiced by Visiting Nurse  
Station KAZOC: From the Context of KAZOC Director”, *The 41st Annual*

*Conference of Japan Academy of Nursing Science*, 2021,12,4(at Aichi Prefectural University, Online).

・査読論文

高桑郁子 「路上生活者を取り巻く生活環境と健康との関連性に関する一考察  
ーエスノグラフィーから見えてきた支援を拒む池袋地区のホームレスを事例と  
してー」、横浜国立大学都市イノベーション研究院『常盤台人間文化論叢』  
3(1): 113-133、2017。

※その他日本語による共著書籍 1 本、単著論文 3 本

以上により、当該学生は看護・医療人類学において博士（学術）の学位を得るにふさわしい学識  
を有するものと認められるため、審査委員会として最終的に合格であると判定した。

注 論文及び審査結果の要旨欄に不足が生じる場合には、同欄の様式に準じ裏面又は別紙によること。